

ザ・ボイスメール 2010年4月号

イタリア紀行8日間

昨年の11月1日から8日まで、イタリアを初訪問しました。世界文学紀行の第4作・5作としてシェクスピアの「ロミオとジュリエット」「ベニスの商人」、また不朽の名画「ローマの休日」の舞台の取材のためでした。第3作までは個人で企画した旅行でしたが、今回はイタリア語に不安があったので、初めてグループツアーの一員としてカメラマンI氏と一緒に参加しました。HISのイタリア紀行8日間です。以下、旅程に沿ってのレポートを3回にわけてご紹介します。最後に、ちょっと面白い、いや大変面白いと思われるエピソードもお伝えします。

ファッションの発信地ミラノ

成田を飛び立ったトルコ航空便は、イスタンブール経由でミラノのマルペンサ空港に着陸しました。雲の上はまばゆいくらいの晴天でしたが(雲の上なんだから当然ですよ!）、雲の下はあいにくの雨でした。空港からは40人乗りほどの大型観光バスに。これからこのバスで長靴型のイタリア半島の北半分を北から南に移動していくことになるのです。

ミラノはイタリアのファッションの発信地。市内に向かう途中にベッカムと夫人が下着を着た大きな広告看板が目を引きました。バスを降りると雨のなかの市内見学。私はスカラ座、ドゥオモ(教会)、高いアーケードのある中心街などを写真撮影。濡れた傘をたたみ、再びバスに乗ると添乗員から面白いイタリア案内がありました。

「市内には汚い車が多いでしょう？これは法律的に一般の住宅で車は洗えない、洗車場のみだからです。平均すると年に2~3回の洗車かな？ですから埃で汚れ、真っ白になった車が多いんです」

「ミラノには地下鉄が3本あって、それぞれ色が違います。きっとこれ以上は増えないでしょう。イタリアという国は、掘れば必ず遺跡が出てくる。そうすると工事は進められなくなってしまいますから・・・」

「イタリアでは夜中も開いているコンビニにはありません。夜は眠るものなんです。イタリア人は8時間が仕事、8時間が睡眠、8時間が遊びで、 $8 \times 3 = 24$ 時間がイタリア人の生活です。それでも成り立っている。日本は夜遅くまで働いて、働いていて便利だけど、どうなんですか？」

「サービスエリアのスーパーでは出入り口が一つで一方通行。アルコール類も売っていません(日本では飲酒運転になるからと禁止されていますね)。トイレも有料です。レジの係員は仕事がゆっくりで釣銭の渡し方もぞんざいに感ずるかもしれません。でも気にしないほうがいいですね。それがここの流儀なんですから」

「ロミオとジュリエット」の舞台ベローナ

楽しみにしていたベローナ訪問も、出迎えてくれたのは冷たい雨でした。街全体が世界遺産に指定されているため、大型バスは石畳の道路を傷めるということで中に入っていく

ことはできません。徒歩による見学です。

お目当ての物語の舞台キャプレット家へ。4 呎幅ほどの石畳の道路から門を入ると、その両側の壁には世界から訪れた恋人たちの愛の言葉を書いた紙が所狭しと貼られていました。その数、数百枚、いや数千枚でしょうか？

幅 10 呎、奥行き 15 呎ほどの小石が敷きつめられた中庭は、雨の日の夕方 5 時というのに観光客の出入りでいっぱいでした。家の壁の高さ 5 呎ほどのところに 2 呎ほどの長さのベランダがあります。ジュリエットが恋の独白をしたというベランダは意外に小さく質素なものでした。

ジュリエット：おお、ロミオ、ロミオ！なぜあなたはロミオなの？お父上に背き、その名を捨てておくれ、さもなければ、それができないなら、せめて愛の誓いを、そうしてくれさえしたらもうこの身はキャプレットではない。

バラの花を別の名前と呼んでみても甘い香りは失せはしない。ロミオとて同じこと、ロミオと呼ばれなくても、その完全無欠のお人柄は名前を離れて残ろうものを。

(福田恒存訳)

ロミオ：恋の軽い翼を借り、その石垣を飛び越えたまでのこと、石の衝立で恋は遮れぬ。

(同上)

こんな熱い思いの二人も、ジュリエットのキャプレット家とロミオのモンタギュー家の仲の悪さが因となって悲運につながっていく。二人を助けようとした司祭が仕組んだ試みが、ちょっとした行き違いから、ロミオはジュリエットの眠る墓場で毒薬を飲み自殺、仮死状態から目覚めたジュリエットはロミオの短剣で胸を刺し後を追う。事の真相を知り悲嘆にくれる両家は、ついに和解するとのストーリーです。

物語は対立する二つのグループと、それに翻弄され悲しい結末へと至る恋人たち、という時代を越えた普遍性を含んでいます。それゆえに、悲劇としての舞台を初めオペラやミュージカル、バレエとして上演され、何回も映画化されてきました。この地にくると、年甲斐もなく、自分もちょっと恋のつぶやきでもしてみたい気持ちにさせるのは、やはり名作の舞台がもたらす雰囲気だからかもしれません。

中庭の奥には 2 呎ほどの高さのジュリエット像が雨に濡れていました。時の経過で少し黒みがかった像は、訪れる人が触った部分だけが金色に浮き出しています。写真に収めようとすると、若い女性群が次々と像の前に立ち、友達のカメラにポーズを取っていてなかなか空きません。なかにはジュリエットの手やふくよかな胸に触れている人もいます。

実は、このベランダもジュリエット像も、戯曲が発表され人気を博した後になって作られたものだと思います。さらに言えば、作者のシェクスピア自身が、実際にここに来て作品を書いたのではないことです。歴史上あった物語を題材に書き上げたようです。「ロミオとジュリエット」に限らず、小説、戯曲、あるいは映画が世に出て有名になってから、その舞台が作品の内容に合わせて作られる、というケースは多いですね。

「観光のための新たな名所を作る」——いわば“町おこし”といった思惑もあるかもしれ

ませんが、それはそれで、人々に夢を創り出してくれてよいのではないのでしょうか。

「ベニスの商人」の舞台ベネチア

ベネチアは英語読みだと「ベニス」。シェクスピアの喜劇「ベニスの商人」の舞台です。でも、実際に舞台とされたのはここにある裁判所くらいのようなのです。金貸業シャイロックに対する、法学者に扮した裁判官ポーシャの名判決が有名ですよ。

——ベニスの商人アントーニオは友人の結婚資金を、ユダヤ人のシャイロックから借りた。指定された日付までに返すことができなければ、心臓近くの肉 1 ポンドを与えなければならない、との条件だった。アントーニオは簡単に返せるつもりだったが、彼の商船が難破して財産を失い返金できなくなってしまった。

裁判の当日。ポーシャは「肉を切り取ってもよい」との判決をくださった。だがその後が続けて言う。

「ただし、契約書にはない血を一滴でも流せば、契約違反として全財産を没収する」
シャイロックは判決に破れ、逆に人の命を奪おうとした罪に問われ死刑になるところだったが、刑を免除される代わりにキリスト教に改宗させられることになる。一般にシャイロックは血も涙もない悪人と見られがちですが、その底辺はもっと深く、キリスト教徒のユダヤ人差別だとの見方もあります。

実は半世紀前、私が高校生のときに学校の文化祭で英語劇「ベニスの商人」が演じられました。そのときシャイロック役だった生徒会長が大変な熱演で、その場面がいつまでも記憶に残っていました。以来、いつかこのベニスを訪れるのが自分の夢となっていたのです。

カメラマンの I 氏と 4 人乗りのゴンドラにも乗りました。小運河から大運河への 30 分ほどの周遊はフィルムがいくらあっても足りないほどの、美しい景観の連続です。少々大げさな表現で、今はデジタルだから実際にはフィルムも必要ないわけですが・・・

船上でさらにカンツォーネでも聞ければ、つくづく“われベネチアにあれり”なんて旅情に浸ることができるでしょう。さすがイタリア観光ハイライトの地ではありました。